

# 中国第四届全国流動注射分析学術報告会（中国・武漢）参加報告

伊 永 隆 史

岡山大学工学部・精密応用化学科 〒700 岡山市津島中3-1-1

---

## Report from the 4th National Conference on Flow Injection Analysis in Wuhan, China

Takashi Korenaga

Department of Applied Chemistry, Faculty of Engineering  
Okayama University  
Tsushima, Okayama 700, Japan

---

中国内陸部の中核工業都市・武漢にある中国地質大学の林守麟教授から、かねてより故石橋信彦先生と親交があり中国のF I A研究で中心的役割を果たしている中国科学院・生態環境研究中心の馬惠昌教授（中国流動注射分析委員会・副主席）の推薦により、第四届全国流動注射分析学術報告会（4th National Conference on Flow Injection Analysis）に出席するよう1993年1月に依頼があった。上記学術報告会でF I A関連講演を招請するものであったが、故石橋先生も第2届報告会に招待されている。馬教授とは、故石橋先生の招聘で来日された第5回フロー分析国際会議（熊本）で1991年8月に知り合ってから、環境分析・プロセスモニタリング分野で相互に情報交換しあい学术交流<sup>1)</sup>を深めつつあるので、中国国内のF I A関連研究の普及状況を知る意味もあり引き受けることにした。

4月21日上海経由で空路武漢に入り、武漢空港まで馬教授および林教授のスタッフに出迎えられたが、到着が深夜になったため大学ゲストハウスの風呂の供湯時間を過ぎてしまった。にもかかわらず、ポット10本に熱湯を用意してくれるなど、最初は手厚い歓迎を受けた。ところが、内陸部に住む人達の思想や経済は旧態依然のまま社会主義市場経済の改革には程遠い様子で、今だに銃を持った兵隊が橋を守護している風景が見られたり、欧米人にはデパートで見物人が群がるなど、中国沿岸部の経済進展振りしか知らない者にとっては驚くべき格差があることを知った。このような経済的貧しさと研究者でも自由に国内外へ行き来が認められているわけではないための遅れからか、私達外国人招待者2名は後々いろいろ不愉快な思いを経験することになったが、ここでは記述を差し控えたい。

4月22日は参加登録と、発表者兼通訳として同行した周小靖氏を交え中国F I A関係者との討論に終始した。23日から大会報告に入り、約100名が参加し特別講演5件を含む96件の学術報告が行われた。初日は大会役員の挨拶に始まり、中国地質大学正門前で参加者の記念写真撮影を行った（写真参照）。大会報告では方肇佗主席の展望講演に続き、特別講演“Theoretical and Experimental Studies on Flow Injection Analysis for Use in Process and Environmental Monitoring”を私が行った。中国語通訳が付いたため



講演内容もある程度理解され、質問責めにあつて時間が大幅延長になってしまい、次の馬教授の講演がキャンセルされたのには大変恐縮した。中国では講演キャンセルが少なくないので最終調整で24日に講演時間が取れたと聞いてほっとしたが、慌てず騒がずの馬教授の態度には感銘を受けた。また懇親会では故石橋先生を惜しむ声があちこちで聞かれた。

講演内容ではハード/ソフトの研究比率などに特に着目したが、ハードを中心とした研究報告は馬教授らのグループ以外にはほとんどなく、既存のFIA部品・装置を購入して応用ソフトウェア開発を行おうとする研究が主であり、研究の緻密さや技術レベルの差はともかく、日本の研究動向との類似性が認められた。

本大会は、4月25日のブラジルから招待のF.J. Krug教授の特別講演、林教授の講演で閉幕となった。次回の第5回目は、1995年に青島海洋大学・陸賢昆教授の主催により青島市で開催されるが、資金不足のため外国からの招待者は予定せず中国国内参加者だけで行うことに決まった。もちろん、外国からの個人参加と資金供与は拒まないそうである。そして、第6回以後はアジアを中心とした国際会議開催を目指す方向とのことであった。

帰国後も馬教授と連絡し合い、故石橋先生が培われた日中友好の精神を生かすべく学術交流・技術交流について相談しているが、現在中国で外貨獲得の有力手段となっている文化財観光と環境・衛生問題に深い関わりがあるFIA技術という視点から、中国科学院・生態環境研究中心を母体にして「中日流動分析技術研究機構(仮称)」のような研究協力組織を設立し、技術移転に協力しようという構想が我が国の分析機器工業界の一部から出ている。日本の分析機器工業界で中国の科学院・大学等が保有する研究補助機能・開発支援力を活用しうる有益な日中友好システムを設置すべき時期に来ているというもので、いずれ本研究懇談会での協議を経てまずフローインジェクション分析分野で出発し、将来クロマトグラフィー分野などに拡張する方向で進めるべく日本、中国双方で合意が形成されつつあることを付記し、故石橋先生のため私も微力ながらお世話に努力したいと念じている。

#### 参考文献

- 1) 伊永隆史: FIA研究懇談会会誌, 10(1), 103 (1993).